

ニッサン情報

日産合成工業株式会社

本社 TEL:03-3716-1211 FAX:03-3716-1214
http://www.nissangosei.co.jp

日本飼養標準 乳牛(2006年版) その1

日本飼養標準 乳牛(2006年版)を上手に使うために

飼養標準を上手に使うには、飼養標準が作られた基本的な考え方や使われているデータ、重点的に見ておくべき解説などを理解するとともに、改訂のポイントを知る必

要があります。そこで、ニッサン情報では第53号では改訂の背景、基本方針、利用の仕方等を、また第54号では改訂のポイントについて、2回に分けて、紹介します。

飼養標準とは

日本飼養標準は、家畜等の成長過程・生産量に応じた適正な養分要求量を示したもので、わが国における家畜飼養の基本となるものです。このため、生産現場ではもとより、行政、普及、教育等の分野で幅広く活用されています。これに従って飼料を摂取させれば、家畜の生産や健康が保たれます。しかし、飼養されている家畜の特性、環境条件（梅雨から夏にかけての高温多湿の飼育環境条件など）、飼料基盤（イネ発

酵粗飼料のようなわが国独特の飼料給与）の違いなどから、他国で作成された飼養標準をそのままではわが国には適応できないケースが多々あります。

これは世界のどの国でも同様で、たとえばアメリカではNRCが、イギリスではARCがフランスではINRAがそれぞれの各国の立地条件に合わせて、独自の考えをもとに、飼養標準を作っています。

今回の日本飼養標準・乳牛改訂の背景

日本飼養標準・乳牛は1965年に「わが国の乳牛飼養標準」として公表されて以来、研究蓄積や酪農を取り巻く情勢の変化に対応して、1974年、1987年、1994年および1999年にこれまで4回改訂されてきました。

しかし、1999年版（以下前版）が公表された以降、養分要求量の精密化の必要性はもとより、「食料・農業・農村基本計画」、「家畜改良増殖目標」あるいは「酪農および肉用牛生産の近代化に関する基本的な指針」などの国の畜産に対する取り組みが見

直され、たとえば、飼料の自給率向上が強く求められてきたこと、環境問題が解決には程遠い状態にあること、そして何よりも飼料価格が高騰し、乳価が低下してきていることなど、酪農を取り巻く状況が大きく変化しました。

このようなわが国の社会・経済的、あるいは農政上の課題に対応するため、また、新たな知見が多く蓄積されたことなどから、日本飼養標準・乳牛の改訂に対する要望が高まりました。

改訂の基本方針と検討体制

改訂の基本方針は主に以下の3点です。

1. 最新の国内データに基づいて前版を検証・改訂して信頼性を向上させる。
2. 最新の海外情報を収集し、国内のデータに基づき検証して、新しい視点を提示する。

3. 解説の充実を図り、高泌乳牛飼養に加え、粗飼料の有効活用や放牧酪農などにも対応する。

改訂は（独）農業・食品産業技術総合研究機構の責任で行われましたが、実際の改訂作業は大学・企業・試験研究機関・行政部

局から構成される「家畜飼養標準等検討委員会」が行いました。検討委員会は、専門家で構成される乳牛部会を作り、乳牛部会は作業チームを編成して、前版の作成後に発表された国内外の研究成果の検討や情勢

の変化を踏まえ、飼養標準に織り込むべき内容を整理して飼養標準原案を作りました。

この原案は「家畜飼養標準等検討委員会」に提案され、審議を経て、最終案が決定されました。

日本飼養標準・乳牛 2006 年版の構成

今回公表された日本飼養標準・乳牛 2006 年版は大きく四つの部分から成っています。ここでは各部分で注意して読むべき点を説明します。

第一部は、「1 章 栄養素の単位と要求量」と 2～3 章にかけての「養分要求量」（多くは表形式で提示されている）です。ここには乳牛の生物学的な養分の要求量が記載されており、世界各国ともあまり大きな数値の違いはありません。

しかし、この中で最も重要な項目は、乾物摂取量です。飼養標準は、養分要求量を飼料として具体化して家畜に給与し、家畜が摂取し、生産物となつてはじめてその価値が生じます。乾物摂取量は飼料の種類や質、環境（温度）条件などの影響を強く受けますし、いかに養分要求量に見合った飼料を給与しても乳牛が摂取してくれなければ、より良い生産は期待できません。

第二部は「4 章 養分要求量に影響する要因と使用上注意すべき事項」です。生物としての乳牛の栄養素要求量は、乳牛のステージ（育成期や高泌乳期など）、飼養方法（早期離乳や放牧など）、環境条件（暑熱や寒冷など）等によって変動しますので、ここで、それぞれのケースで、養分要求量

をどのように補正すればよいか、またその時に注意しなければならない点が記載されています。

この章は、外国の飼養標準を鵜のみににはできない部分ですので、国内での実験データをもとに記述してあります。

第三部は「5 章 飼料給与上注意すべき事項」です。先にも述べたように飼養標準は、養分要求量を飼料として具体化して給与し、家畜が摂取して、生産物となつてはじめてその価値が生じます。

この章では、養分要求量を具体化する場合の注意点について記載されています。特に乳牛のように自給飼料をかなり摂取する場合は飼料基盤の影響を強く受けることとなります。この章に記載されていることは、わが国の飼料事情を反映しており、外国の飼養標準に書かれたことをそのまま応用できない部分です。いわば、飼養標準の心臓部分で、かなり多くのページを割いて記載されています。地域飼料資源の利用や飼料添加物の使い方などが記載されています。

第 4 は、参考資料（文献および飼料成分表の抜粋）や、養分要求量を手軽に求められるパソコン用のプログラムなどです。

当社の対応

飼養標準を具体的な飼料として家畜に給与するには、環境条件、泌乳ステージ、給与飼料の種類などによって変動する養分要求量に対応して、適正な養分の飼料を調製して給与する必要があります。

当社では給与飼料の養分調製に不可欠な、飼料添加物や混合飼料を製造・販売しております。また、生産者のご要望に合わせた飼料添加物や混合飼料の設計・製造のご相談に応じております。

当社の製品およびご要望に合わせたプレミックス等の製造の詳細については、下記の電話までお問い合わせ下さるか、ホームページをご覧ください。
また技術的な問題等はホームページの中の「お問い合わせ」のページをご利用ください。

日産合成工業株式会社 電話:03-3716-1211、FAX:03-3716-1214
<http://www.nissangosei.co.jp>